

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002723">https://doi.org/10.15084/00002723</a>

# 首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布\*

鎌水 兼貴  
(国立国語研究所)

三井 はるみ  
(国立国語研究所)

## 1. はじめに

本研究は、首都圏若年層における非標準形の使用意識に関して、大学生を対象としたアンケート調査を実施し、首都圏における言語使用の実態を、地理的分布から分析したものである。

首都圏は、標準語の成立基盤となる地域であり、言語的にもっとも重要な地域である。それにもかかわらず、巨大な人口、多様な構成住民、調査困難などを理由として、言語の地域差に関する調査研究があまり行われない地域である。むしろ、そうした複雑さは、従来の方言学的な「はえぬき」重視の地域差よりも、個人差すなわち社会的・心理的側面に焦点が当てられることが多かったといえるだろう。

このように首都圏の言語は、全域で一様な言語が使用され、特に若年層では、非標準形についても首都圏全体で言語圏を形成していると認識される傾向がある。そして首都圏若年層の言語はインフォーマル場面でも「共通語の俗語」のような位置づけを持っているといえよう。

しかし実態としての首都圏若年層の言語使用をみてみると、地域的均一性が高いのは確かだが、地域差は存在している。すでに1980年代の調査研究で「東京新方言」(井上1994)などの形で、首都圏における非標準形とその地域差は指摘されてきた。

首都圏の言語が他の地域の言語と異なるのは、周辺地域の方言形を取り入れて全国に発信する強力な力を持っていることである(井上・荻野1984)。井上・荻野(1985)は、そうした発信力を研究する上で言語意識を調査し、社会的・心理的側面といった個人差から分析を行ってきた。言語意識を調べることで、なぜその語形が使用可能になるのかを解明することができる。このことから、非標準形の地理的伝播を解明する場合にも、言語意識の地理的分析を導入する必要があると考える。

以上から、本研究では、首都圏における非標準形について、使用に関する地図だけでなく、使用意識の地図を作成することで、

- ・首都圏の若年層にはどのような言語的地域差がみられるか
- ・非標準形の使用意識は使用の地域差とどのように関係しているか

という2点から首都圏若年層の非標準形使用の要因の解明を試みる。

---

\*本稿は、鎌水兼貴・三井はるみ(2013)「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」第31回社会言語学会研究大会の発表原稿に加筆、修正をおこなったものである。また、本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト(「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」研究代表者 三井はるみ)による研究成果の一部である。本研究に調査に協力していただいた、プロジェクトメンバーの國學院大学の久野マリ子氏、日本大学の田中ゆかり氏、文教大学の亀田裕見氏に感謝を申し上げます。また、すべての回答者の皆様に御礼申し上げます。

## 2. 調査概要

本研究における若年層の調査対象は、大学生とした。大学生への調査手法として、本研究では携帯電話のメールを用いた調査システム RMS (Real-time Mobile Survey system) (鎗水 2011, 2012) を用いたほか、一部にアンケート用紙も用いた。生育地は 5 歳から 15 歳までの最長居住地とし、住所は大字レベルまで回答してもらった。

2011 年 6 月～2012 年 6 月の首都圏での試行調査の結果をもとに 38 の非標準形を選定し、2012 年 7～11 月に東京都と埼玉県に立地する大学生約 400 名に対して調査を実施した。そのため回答者の分布は東京都・埼玉県に多く、神奈川県、千葉県は少ない点で注意が必要である。

調査を行った 38 語のうち、特に回答の分布が明瞭な、以下の 7 つの非標準形については、使用するか否かだけではなく、使用意識をたずねることにした。

- |          |            |
|----------|------------|
| 1. カタス   | 片づける       |
| 2. モス    | 燃やす        |
| 3. バナナムシ | ツマグロオオヨコバイ |
| 4. ダイジ   | 大丈夫        |
| 5. アオタン  | 青あざ        |
| 6. ズルコミ  | 割り込み       |
| 7. ヨコハイリ | 割り込み       |

これらの語形はバナナムシを除き、この 20～30 年間、首都圏で「新方言」として、井上・荻野 (1984) や、井上(1988)をはじめ、多くの調査がなされてきた語形である。

調査内容は、以下の 5 種類である。

- 「使用」 (「言う」「聞いたことがある」「聞かない」)
- 「使用頻度」 (「低い」～「高い」、7 段階)
- 「通用範囲」 (「身の回りだけ通じる」～「誰にでも通じる」、7 段階)
- 「使用場面」 (「特定のときだけ」～「どんなときでも」、7 段階)
- 「丁寧度」 (「くだけた言い方」～「改まった言い方」、7 段階)

「使用」が 3 択で、これは全 38 語についておこなった。上記の 7 語については「使用頻度」以下の 4 項目もたずねた。意識項目は 7 段階評定 (左が 1, 右が 7) であるが、どれも具体的な場面を設定していないため、回答者がどのような場面を想定して回答しているかは不明である。また、標準形や伝統的方言形の意識は尋ねていないという問題もある<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> バナナムシやアオタンについては、標準形を確定するのが容易でないが、それ以外については標準形が使用されないことは考えにくい。そのため標準形や伝統的方言形との関係を考慮しないと、何がどう変化したのか、という基準が不明なままになってしまう。ただし、ヨコハイリとズルコミに関して相互の関係はわかる。

### 3. 首都圏若年層における非標準形の分布

数多くの先行研究で、すでに地域差の存在がわかっている非標準形が多いが、言語地図としての報告は少ない。そのため、まず分布の広がり方について概観する。

#### 3. 1 非標準形の分布概観

図1は、黄色い小さな虫である「ツマグロオオヨコバイ」の呼び名「バナナムシ」の使用に関する分布である。東京都23区西部～多摩地域と、隣接する神奈川県北部に「言う」が分布しており（囲み線）、バナナムシが現代の「東京方言」であることがわかる。

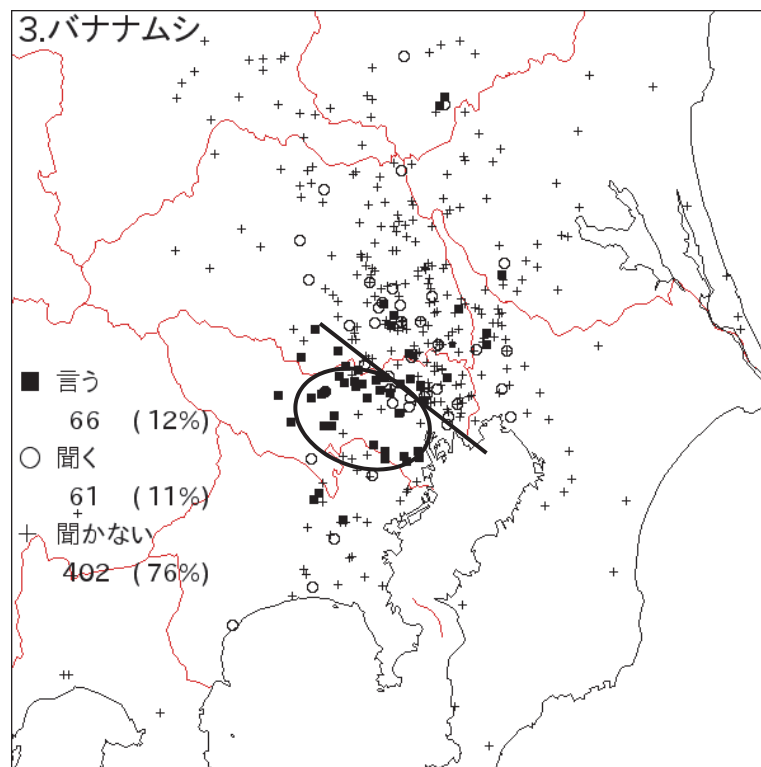


図1 バナナムシ(ツマグロオオヨコバイ)の使用

図2・図3は、列などへの「割り込み」を問わず2つの非標準形「ヨコハイリ」と「ズルコミ」の分布である。図2のヨコハイリは、神奈川県～東京都23区西部多摩と、首都圏外周部に分布しており、埼玉県東部から東京都23区東部にかけて不使用地域が広がっている（囲み線）。ヨコハイリ不使用地域で使われる非標準形が、図3のズルコミである。ズルコミとヨコハイリが相補分布の関係にあることがわかる。

井上(1988)による東京都・神奈川県調査では、高年層では全域で「ワリコミ」が分布していた。ヨコハイリは若年層の新しい語形として神奈川県全域に普及し、東京23区西部、多摩でも散見されていた。一方、ズルコミも若年層の東京23区東部でわずかに使用がみられており、埼玉県側・千葉県側より広がってきた可能性がある。図2・図3において「聞いたことがある」の分布を比較すると、ズルコミよりヨコハイリのほうが「聞いたことがある」の回答者が多い。伝播の力において、ヨコハイリがズルコミよりも強いことが予想される。

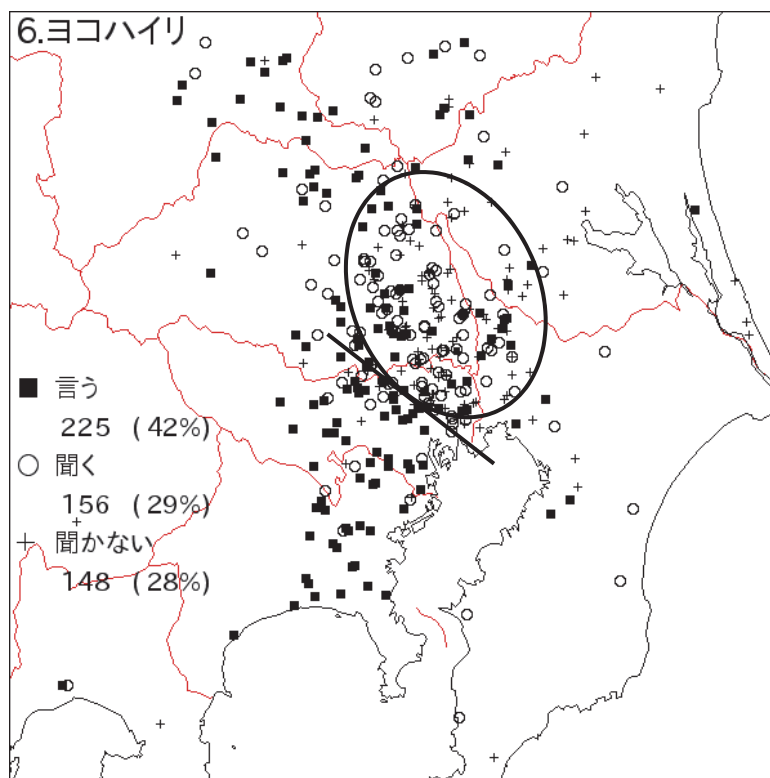


図2 ヨコハイリ（割り込み）の使用

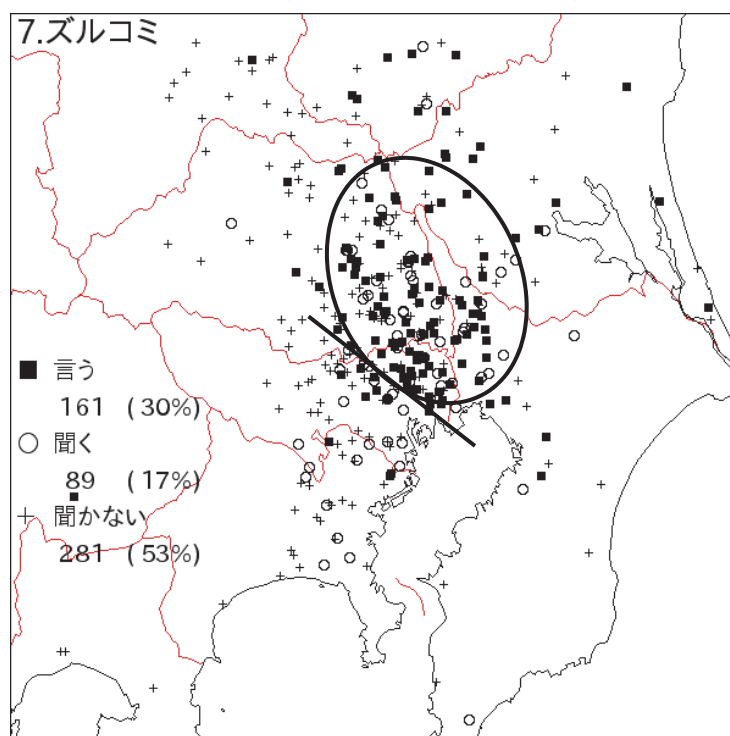


図3 ズルコミ（割り込み）の使用

### 3. 2 首都圏若年層における非標準形の分布境界

非標準形の分布を概観すると、図1~3の斜線、すなわち東京都23区の北東部と南西部の間に回答の違いがみられる語が多いことに気付く。調査した38語の中でも、これ以外にも、ダベ?(でしょ?)、イクベ(行こう)、~トキアル(~ことがある)、モス(燃やす)、アルッテ(歩いて)、センヒキ(定期)など、さまざまな語でみることができる。

この東京都23区北東部と南西部の間とは、伝統的な方言境界とされている東京の下町地域(北東部)と山の手地域(南西部)の境界にほぼ一致する。つまり現在の若年層においても、非標準形の使用において山の手と下町の間境界<sup>2</sup>があることを示していると思われる。

この境界が伝統的な方言境界と同一のものかどうかについては検証をする必要がある<sup>3</sup>が、少なくとも、地域的なまとまりという点で、下町地域が埼玉県・千葉県側と、山の手地域が東京都多摩地域・神奈川県と分布上の連続性をもつ語が多いことが明らかになったといえる。

## 4. 使用意識の地域差

### 4. 1 使用意識に地域差はみられるか

つづいて、使用意識の地域差について分析をおこなう。ヨコハイリ(割り込み)は、井上(1988)にあるように、30年前は神奈川県を中心とした分布であったことがわかっている。図2で新しく使用するようになった地域と、従来から使用していた神奈川県とで、ヨコハイリの使用意識がどのように違うかが問題となる。

図4は、図2のヨコハイリ(割り込み)の使用者(「言う」を回答)における使用頻度意識を地図にしたものである。「どのくらいの頻度で使用するか」という意識は、「語そのものの使用頻度」と「使用場面における語の選択頻度」を分離していない、あくまで主観にすぎないものだが、地図で表示すると、地域によって明確な違いがあらわれた。

図4をみると、神奈川県では使用頻度が非常に高いと意識されていることがわかる(囲み線)。一方で、東京都や埼玉県での使用頻度意識はあまり高くない。

前述のとおり、ヨコハイリは神奈川県から北側に普及したことが、過去の調査からわかっている。つまり初期に普及した地域では使用頻度が高く、後から普及した地域は使用頻度が低いと認識されていることになる。

井上(1983)は山形県内陸部の調査で、共通語形の地理的伝播が上位場面から下位場面への普及と複合して進行するため、場面差が普及時期の時間差となることを示している。同様に、図4の結果についても、使用意識に地域差が存在することを示すにとどまらず、共時的な使用意識の違いが、通時的な普及時期の違いを反映していることを示唆するものである。

<sup>2</sup> 全員使用・全員不使用のような明確な境界ではなく、使用者の割合の違いという形であらわれる。

<sup>3</sup> 伝統的な東京方言使用地域としての「山の手」「下町」は、あくまで「はえぬき」話者についてである。東京は人口流動が激しく、現代の東京都23区北東部、南西部において、はえぬき住民は少数派であり、伝統的な東京方言話者もまた少数派であると考えられる。そうした中で、今回の境界が伝統的東京方言の継承としての結果と断定するのは難しいと思われる。この点については、今後もさまざまな観点から調査を継続する必要があると思われる。

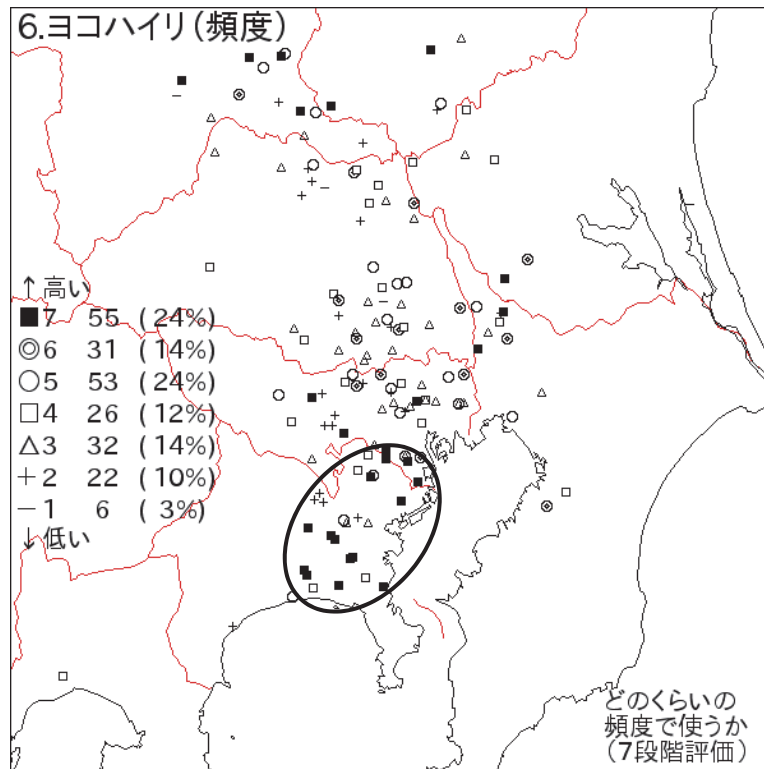


図4 ヨコハイリ(割り込み)の使用頻度意識

#### 4. 2 非標準形カタスの普及経路

これまでのことをふまえて、非標準形カタスの分布について考える。図5は、片付けることを「カタス」と言うか、という分布である。首都圏南部のほぼ全域で「言う」が分布している。井上・荻野(1984)においては、東京都23区西部・多摩、神奈川県では使用率が低いとされ、当時の若年層での使用が減少しているようにみられていたが、1990年代には千葉県松戸市で増加していることが報告されており(早野1996)、近年著しく普及していると思われる。

ただし、東京都西部地域を中心に「聞いたことがある」が分布しており(囲み線)、不使用地域がわずかに残っている。図5では地点数が少ないため、試行調査の結果もあわせた図6をみると、不使用地域の存在がより明確になる(囲み線)。東京都西部のうち、多摩地域の西側にはすでに普及しており、多摩地域の東側だけが使用地域に包囲される形で不使用地域を形成していることがわかる。



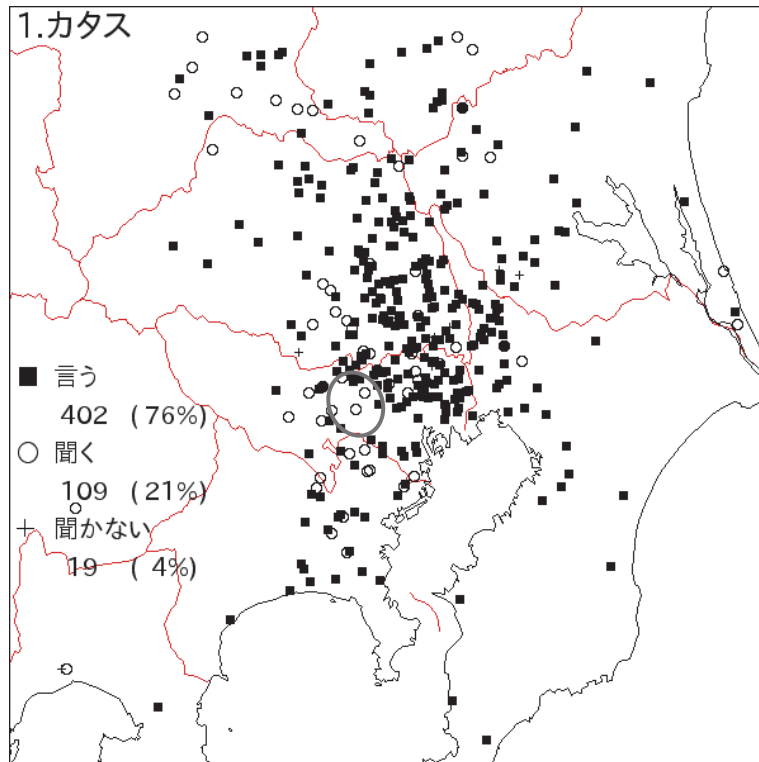


図5 カタス（片付ける）の使用

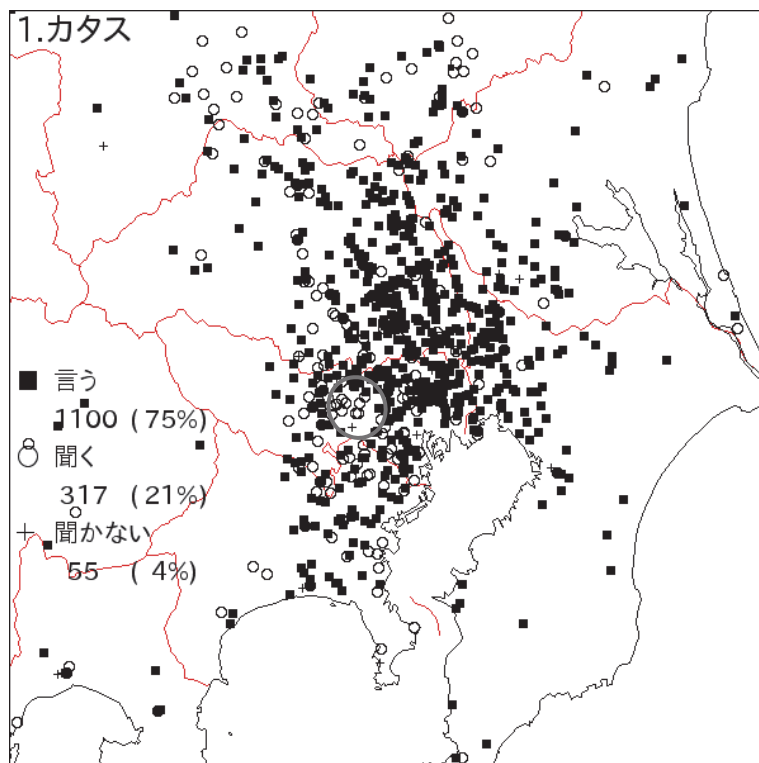


図6 カタス（片付ける）の使用（試行調査も含めたもの）



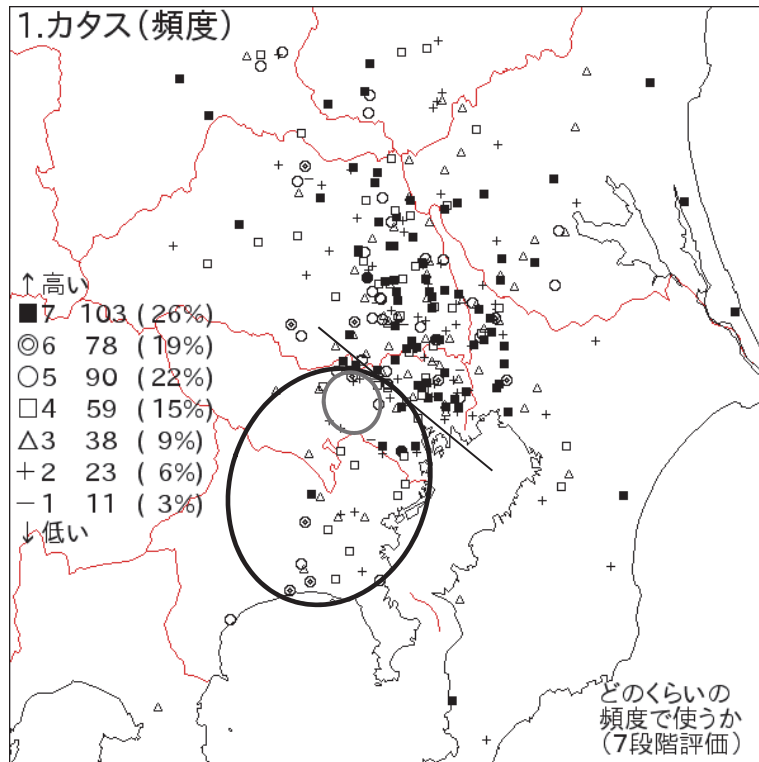


図7 カタス(片付ける)の使用頻度意識

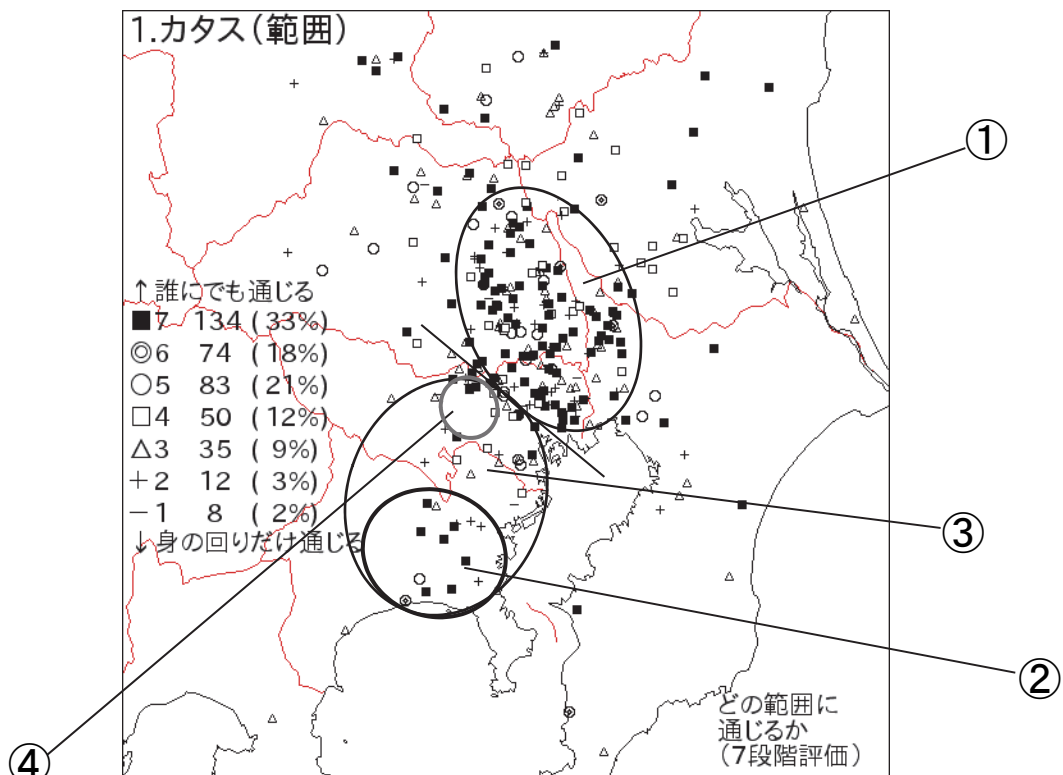


図8 カタス(片付ける)の通用範囲意識

なぜ東京都多摩東部だけが不使用地域となったのか。東京都西部に不使用者が多いことや、前述の井上・荻野(1984)との結果から、多摩東部の周辺地域では、カタスが最近になって普及したことが予想される。ここで前節のヨコハイリのように、使用意識の地域差が普及時期の違いを反映するとしたら、カタスの使用意識の地域差によって、普及時期を予想することができる。

図7はカタスの使用頻度意識の地図である。全体的に使用頻度が高いと意識している人が多いが、東京都23区西部と神奈川県北部では、使用頻度があまり高くないことがわかる(囲み太線)。この地域に隣接する地域は、図5・図6での「聞いたことがある」という回答が多い地域、すなわち不使用地域であることをあわせると、この地域ではカタスが新しく使用が拡大したことが予想される。

しかし、図8の通用範囲意識の地図をみると、東京都23区南西部から神奈川県北部(③)にかけての地域と神奈川県南部(②)とでは、通用範囲の意識において差があることがわかる。神奈川県南部では通用範囲の広いことばとして取り入れられている一方で、東京都23区南西部・神奈川県北部においてはあまり広がらないと意識されている。

このことから神奈川県南部での普及が東京都や神奈川県北部より早く進行したと予想することができる。

以上から、現在は首都圏南部におけるカタスの使用者は東京都多摩地域の一部を除いて全てを覆っているが、かつての使用者の分布は、図7の使用頻度を高いと意識する人々の分布に近かったのではないかと推測することができる。このとき図7の分布の境界は、東京都23区の東西、すなわち山の手と下町であり、これは、前述の首都圏若年層において多くみられる境界と一致することからも妥当な推測であると判断できる。普及に伴って境界を越え、図8のように、神奈川側に普及し、周囲を囲まれるような形で図5・図6のような使用者の分布になったと考えられる。整理した表を以下に示す。

図5~8を整理した表を以下に示す。もともと埼玉県から東京23区北東部を中心に再普及していたカタスは、東京都23区南西部に入る前に、神奈川県側に入り、特に神奈川県南部で先に普及した。それから東京都23区北東部や、神奈川県北部、東京都多摩西部地域に普及し(どの地域からの普及かは不明)、現時点では東京都多摩東部地域だけが不使用地域として残っている状態である。多摩東部地域は使用地域よって周辺を囲まれているため、近い将来使用地域なることが予想される。

表 カタスの普及時期と意識との関係(番号は図8中のもの)

		使用頻度意識 (図7)	通用範囲意識 (図8)	普及推定時期
①	埼玉・東京23区北東部	高頻度	広範囲	早い ↓
②	神奈川南部	低~中頻度		
③	東京23区南西部・神奈川北部		低~中範囲	遅い (将来使用?)
④	東京多摩東部	φ頻度(不使用)	φ頻度(不使用)	

## 5. まとめ

以上、首都圏若年層の非標準形の使用意識を地理的分布の観点から分析することにより、以下のような傾向がみられた。

- ・東京都の山の手地域と下町地域の間には、非標準形使用に大きな境界が存在する。
- ・下町地域は埼玉県・千葉県と、山の手地域は東京都下・神奈川県とそれぞれ連続性がある。
- ・使用意識項目の分布に地域差が現われる場合、その地域差が、かつての分布の痕跡である可能性があり、普及経路の手がかりとなる。

また、東京都 23 区西部～多摩東部の地域は、非標準形の普及が、周辺地域より遅れる傾向がみられた。本稿ではカtas 1 語だけで説明したが、一般化するには実例が必要である。今回の調査では、ダベ? (でしょ?)、イクベ (行こう) といった「べ(ー)」の使用がカtas と似た傾向を示している。首都圏若年層で再普及中の現象といわれるが、この点でもカtas と似ている。東京都 23 区南西部・多摩地方では不使用者が多く、周辺地域よりも普及が遅いとみられる。

このことは首都圏の言語が中心部と周辺部に分かれる可能性を示唆している。もし中心部で非標準形が避けられているとしたら、前記の「べ(ー)」のような有名な伝統的方言形は、カtas よりも非標準形的色合いが残り、受け入れが鈍い可能性がある。

このような言語現象について検証を重ねることで、首都圏の言語のモデル化ができ、標準語の成立過程の解明にもつながると思われる。さらなる詳細な調査・分析が必要であろう。

## 文献

- 井上史雄(1983)『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究 —東京・首都圏・山形・北海道—』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 井上史雄(1985. 2)『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』明治書院.
- 井上史雄(1985. 3)『関東・東北方言の地理的・年齢的分布(SF グロットグラム)』東京外国語大学語学研究所.
- 井上史雄編(1988)『東京・神奈川言語地図』.
- 井上史雄(1994)『方言学の新地平』明治書院.
- 井上史雄(2011)『経済言語学論考』明治書院.
- 井上史雄・荻野綱男(1984)『新しい日本語・資料図集』文部省科学研究費補助金「言語の標準化」資料集.
- 井上史雄・荻野綱男(1985)『新しい言葉の伝播過程—東京中学心理調査—』科学研究費補助金研究成果報告書.
- 荻野綱男・井上史雄・田原広史(1985)「周辺地域から東京中心部への《新方言》の流入について」『国語学』143.
- 加藤正信・大橋純一・武田拓・半沢康(2004)『関東・東北境界域言語地図 常磐線・磐越東線グロットグラム』科学研究費補助金研究成果報告書.

東京都教育委員会(1986)『東京都言語地図』.

早野慎吾(1996)『地域語の生態シリーズ関東篇 首都圏の言語生態』おうふう.

鐘水兼貴(2011)「携帯電話を利用した首都圏若年層の言語調査」『情報処理学会研究報告』  
2011-CH-92, 1-13.

鐘水兼貴(2012)「携帯電話を利用したリアルタイム方言調査システム」『日本行動計量学会 第40  
回大会抄録集』 349-352.